

東海の古代

第304号 2025年12月

会長 : 宮澤健二
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

倭と倭人（1）

小牧市 宮澤 健二

はじめに

『漢書』地理志燕地条の「樂浪海中有倭人、分爲百餘國、以歲時來獻見云」の一文は、学生時代に習った時には深く考えず、「樂浪郡の先の海の中に倭人がいて、百余国に分かれ、定期的に貢ぎ物を持参して来た、と言われている」と素直に理解したが、様々な文献に接するにつれ、違和感を覚えるようになった。その理由は、①「有」という用字（その後の史書は「在」）、②＜人が海中に有る＞という表現、にあったと思う。本稿は、このことの整理を目的としている。そのため、鳥越憲三郎の倭族論を概観し、現代的な視点を取り入れながら確認する。その後、鳥越の理論を発展的に論じた出野正、張莉の論考に基づき検討を加えることにした。

1 鳥越憲三郎による倭族の概念

鳥越憲三郎は著書『古代朝鮮と倭族』（1992）において、倭族の概念を整理している。

鳥越は、中国雲南省に点在する「滇池」をはじめとする多くの湖の湖畔で、原生稻から水稻の人工栽培に成功したと考え、水稻農耕という生産様式への移行が、①高床式住居の考案、②雲南から各河川を通じ東アジア、東南アジアに移動分布という特徴で捉えられる民族の総称として、「倭族」という新しい概念で捉えたとした。

北方の黄河流域では、漢族や苗族が黍などを中心に畑作農耕を営み、土間式住居で暮らしており、倭族とは対蹠的である。水稻農耕と高床式住居、畑作農耕と土間式住居という生活様式の差は、炉が床上か地面か、屋内で履物を脱ぐか脱がぬかの差異でもあるが、現在でもそれらは習俗として守られている。

この概念は、倭を日本の古称とする固定観念から解放したといえる。教科書で明代の倭寇について習うとき、「日本人でない者も含まれていた」という説明が付加されたが、もともと中国人にとって、倭を日本の古称に限定していなかったと考えるのが妥当であろう。

2 倭族の拡散

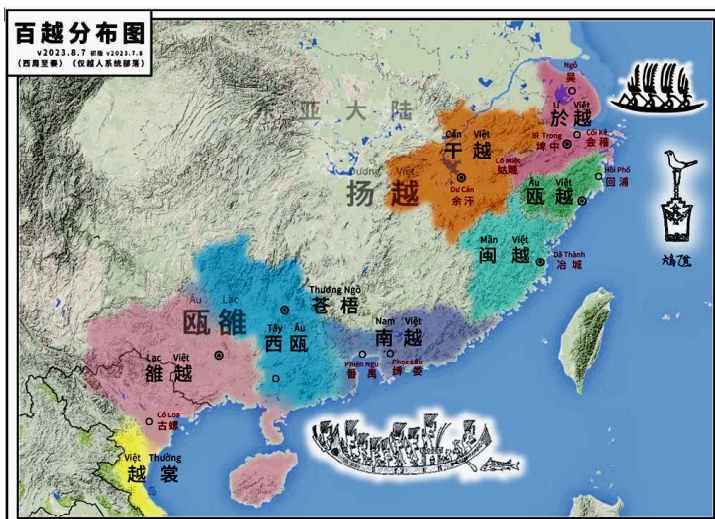
鳥越によれば、倭族は、雲南からサルウィン川、メコン川を伝ってミャンマー、ラオス、タイ、カンボジアへ、ソンコイ川によってベトナムなど東南アジアへ、紅水河、珠江を経て南シナ海の広東へ、さらに海南島やボルネオ島にも移ったとし、さらに、長江に沿って

進出し、朝鮮半島や日本列島にまで分布したとしている。

以下は、鳥越の所説の要点である。

『史記』などには、長江下流域以南に「百越」の存在が記されているが、その於越(浙江)、閩越(福建)、揚越(江西)、南越(広東)、駱越(安南)などの「越」は、上古音で「ヲ」woであり、それは同じく上古音の「倭」woに通じ、類音異字にすぎない。つまり越の国をはじめとして、多くの倭族が居住していた。

長江に沿って移動した倭族の最古の遺跡は、杭州湾の南側の錦江に沿う河姆渡遺跡で、約七千年前に水稻農耕民として高床式住居の生活をしていたことが判明している。また、杭州湾の北側にも同時代の羅家角遺跡があり、ともに越が都をおいた紹興に近く、それら遺跡人の後裔が越人、いわゆる倭人であったとみてよい。



3 水稻の原生種に関する最近の知見から

(1) 水稻の原生種

鳥越が当時予想した水稻農耕は、現代的な視点ではどうであろうか。アジアイネには、大きく分けてインディカ種とジャポニカ種があり、DNA解析の結果から、それぞれの原生種と原産地について以下のような見解が示されている。インディカ種は、複数の野生イネ集団が独立して栽培化された可能性が示唆されており、原生地はインド東部から中国南部にかけての地域や、東南アジアの複数の地域と考えられる。また、ジャポニカ種は、遺伝的に単一の起源をもつとされ、特定の遺伝子変異の選抜によって栽培化が進んだと考えられる。中国の長江(揚子江)中・下流域にある河姆渡遺跡から野生イネと栽培イネの両方が発見され、水田遺構も確認されていることを根拠に、その辺りが原生地として有力視されている(その2000年前の上山遺跡でも栽培種の籾は発見されているが、水稻栽培である確証はない)。



(2) 古気候変動の影響

水稻は自然環境が重要であり、現代の中国では、秦嶺山脈・淮河が畑作と稲作を分けている。ただし、約4000年前には温暖な時代であったためか、山東半島付近でも水田遺構があったことが確認されている。しかし、長江デルタの近傍から採取された海洋堆積物コアを用いた東京大学海洋科学研究所の研究によれば、過去の表層海水温変動を復元した結果、約4400年前～3800年前に大規模かつ複数回の急激な気候寒冷化イベントが発生し、約4200年前に長江文明が一時中断した一因となった可能性が高いとしている。前述のジャポニカ種が遺伝的単一起源である理由は、このことに起因するのかもしれない。この時点で、

水稻栽培を行う集団が、中国大陸を幾世代にもわたり北上し、朝鮮半島南部や日本列島で水稻を根付かせることは困難となった。また、佐藤洋一郎（静岡大学）は、朝鮮半島に存在しない中国固有の水稻が日本列島で出土していることから、朝鮮半島を経由せずに直接日本列島に伝来した可能性を示唆している。

(3) 水稻栽培の担い手

ジャポニカ種発祥の地、長江下流域から一世代で、朝鮮半島南部または日本列島に伝播させる必要があり、水稻の担い手は海洋民族であることが必須になる。日本列島への伝播は、菜畑遺跡や板付遺跡の存在から約三千年前（縄文晩期後半）と考えられるが、約6000年前の朝寝鼻貝塚（岡山県）でイネのプラントオパールが発見されたことから縄文人もイネ（おそらく陸稲）の栽培を行っていたと考えられる。また当時、朝鮮半島南部にも縄文人が住んでいたことが分かっている（礼安里遺跡、約6000年前、形態学的類似）。当時の朝鮮半島は、採集生活には不向きな植生であつたらしく過疎的な状況であつたという見方もあり、水稻栽培の伝播は、朝鮮半島南部と日本列島とに居住する縄文人になされたといえる（韓族の居住は紀元前2C）。

(4) 水稻栽培と民族性

野生イネは種子が熟すと自然に脱粒するが、DNA分析により、栽培化の過程で脱粒しにくい形質が獲得されたことが明らかになっている。このことは、収量増加や環境ストレス耐性などの有用な形質も同様である。

つまり、原生の水稻は、田に水を張って放置すれば次の年に発芽し収穫できたが、収穫量を上げる選抜を重ねるに連れ、脱粒性が失われ、毎年田植えが必要な種に変化したということの意味する。それに伴って社会も変容し、収穫量の増加が人口増加を支え、多くの人の協力で田植えを行う文化が形成されたと考えられる。

4 日本列島につながる倭人

(1) 呉と倭人

鳥越は、朝鮮半島や日本列島に渡来した倭族を語るのに、呉の国は重要であるとし、以下のように述べている。

呉の国は『史記』呉太伯世家が記すように、周公の長子の太伯が継承問題で身の危険を感じ、この地に逃れて倭族と同じに断髪・文身し、後に建国したものである。そのとき太伯に帰服して国を築いたという千余家は、土着の倭族たちと考えられる。それは、呉の領域であつた長江の三角州にある遺跡（上海市郊外の松沢遺跡、太湖の南側の呉興邱城遺跡、太湖の東側の草鞋山遺跡や北側の圩墩遺跡など）が六千年前以上に遡ることから判断できる。

長江の下流域に達した倭族の一部は、さらに山東半島に向けて北上し、今の安徽省・江蘇省・山東省にかけて分布した。その山東省の北辛遺跡は約七千年前のものである。

文献の上では周代に徐・淮・郟・莒・奄・萊などの国を、漢族は異民族として「東夷」と呼んだが、鳥越はそれらの国は倭族によって築かれたものであるとしている。中国東部・南部に居住する非漢民族を東夷と呼んだり、百越と呼んだりしたように、倭も境界が漠然とした呼称であろうが、鳥越の提唱するような倭族の概念で括ることができるかどうかは更なる検討が必要かもしれない。

その地域は後に呉の領域となり、呉も春秋時代末の扶差王のとき、南の越王勾践に討たれて亡びる。その呉の滅亡(BC473年)を契機として、呉の遺民だけでなく、呉の領民となっていた東夷諸国の民たちとともに（まさに呉越同舟）、進んだ稲作文化を携えて朝鮮半島の中・南部に亡命した。北部でなく、中・南部に逃れたのは、呉の敵対国・燕が渤海湾から遼東半島にかけて領域とし、真番（鴨緑江以西）や朝鮮を攻略して服属させ、現在の平

壤の近くまでのびる要塞を築いていたためである。

鳥越は、その一部が日本列島に渡来して、いわゆる弥生人になったと考えているが、中国から直接に日本列島に到った人々も多かったであろう。『晋書』倭人伝に、日本の倭人が「自ら太伯の後という」とみえるのは、そのような事情によると考えられる。

(2) 朝鮮半島南端の倭人

朝鮮半島の倭族としての韓族が馬韓を軸とし、後に辰韓・弁韓に分立して建国することになるが、ここで問題になるのは、ある時期以降の朝鮮半島の南端に、韓族と区別された倭人が住んでいたことである。『後漢書』には馬韓について、「その北は楽浪と、南は倭と接し、辰韓は東にあり」と記し、弁辰(弁韓)についても「辰韓の南にあり、その南また倭と接す」、「国に鉄を出し、濊・倭みな従って之を^{あきない}市す」とある。このことは『魏志』でもほぼ同様に記述され、その「倭」は日本列島に住む倭人ではなく、半島南部のかなり広い地域に倭人が居住していたことを示している。しかも『後漢書』馬韓の条に、「その国は倭に近き故、頗る文身(入墨)する者あり」とみえ、馬韓の領域にまで倭人が居住していたのか、倭人の影響で馬韓人の中にも文身する風習が広まっていたのかを示している。

倭人が文身していたことは確かである。それは古代の倭族に共通してみられたことであるが、早く文身の風習を廃した部族もあれば、ワ族・独竜族・カレン族などや、タイ族の一部には現在でも文身の風習が伝えられている。したがって韓族が文身しないことをもって、倭族に属しないと速断するわけにはいかず、他の事柄(例えば、卵生神話や鳥居、しめ縄など)を通して、倭族の文化的特質を伝承していると判断できる。

朝鮮半島に渡来した倭族が、一つの集団であったとは限らない。朝鮮半島中部に上陸し、先住の濊族・貊族を制しながら、倭族として最初の国を築いたのが辰国であり、その対外的に認知された民族名が韓族である。その辰国を母体に、後に辰韓・弁辰(弁韓)が分立し、母体も馬韓と呼称されるようになるが、馬韓の辰王がすべてを統轄した。その範域では、馬韓の習俗が風靡することはいうまでもない。

これに対し、山東半島から朝鮮半島南部に上陸した倭族の一団もあったろうが、距離的に遠いことから、小規模集団と考えられ、大きな国の形成以前に、韓族が周辺に南下してきた。そのとき弁辰への統合を嫌って、加羅または伽耶と呼ばれる小国にとどまった。それが『三国志』魏志倭人伝にみえる狗邪韓国と称されるものであった。彼らは文身の習俗をもつため、古称の倭人の称で区別されたと考えられる。

以上、鳥越の倭人に関する論考を、筆者の考察とともにまとめた。

放射説と榎説の是非

吉川市 堀口 啓一

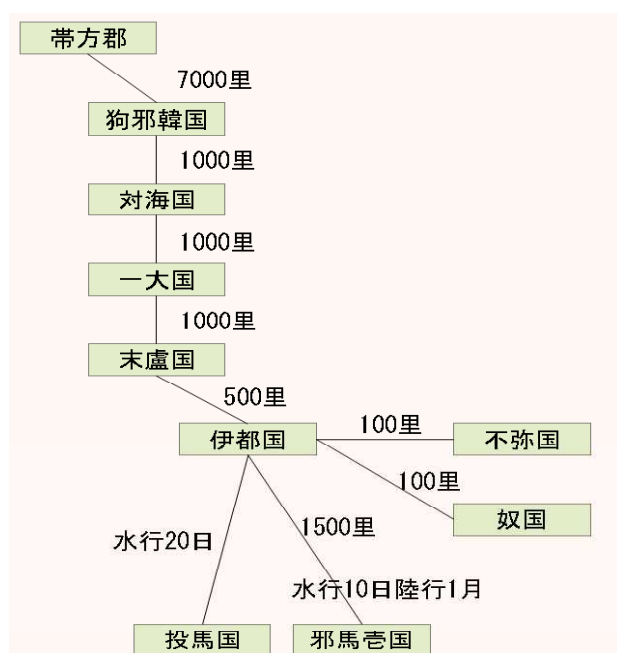
1 榎説の是非

放射説^(*)^(*)(あるいは放射式読法もしくは放射記法)に基いて『魏志』倭人伝の行路記述を読解する見解の是非はどうであろうか。放射説(榎説)を採った場合の行路略図は次の通りとなる。

*1 「魏志倭人伝の里程記事について」『学芸』33号(榎一雄、1947年)で述べられている。

*2 伊都国を基点とする放射式読法は一般的に榎一雄氏が提唱したとされているが、どうも違うらしい。『邪馬台国〈1〉一論集』(鈴木武樹、大和書房、1975年)では放射式読法を豊田伊三実氏の説であると見做して、「邪馬台国論を読み」(豊田伊三実、1922年)を収録している。どうやら豊田説を基に発展させたのが榎説であるようだ。

図1 放射説における行路略図



この見解では伊都国から各国へ分岐する事で分岐各国が九州に収まる事になり、九州説論者にとっては福音となったがヤマト説論者にとっては都合が悪い事になってしまったようで、ヤマト説論者の中には激しく批判する者もいるようである。心情的に穏やかならぬ事ではあるのかも知れないが、批判と批難は区別すべきであろう。この論説の行路地図は次の通りとなる^(*)。各国の場所は一旦榎説に則り、伊都国を福岡県糸島市、女王国を福岡県旧三井郡(現福岡県久留米市)と見做して作図している。

図2 放射説における行路地図



この図の特徴は、伊都国から水行の矢印線と陸行の矢印線が共に伸びていると言う事にある。有明海を経て久留米市まで水行しているが、筑後川を遡上するのであろう。これは次の行路文に対する榎説の苦心の解決案のようだ。

南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日陸行一月(『三国志』『魏志』倭人伝)

榎説ではこの行路文を、
 ・水行の場合は十日の行路
 ・陸行の場合は一ヶ月の行路
 と読解する訳だ。この読解は志田不動麿氏が唱えて^(*)榎氏が賛同したと言う経緯がある。

^{*}1 白地図専門店が公開している白地図(<https://freemap.jp/item/region/kyusyu.html>)を基に編集している。

^{*}2 『倭の女王』(志田不動麿、吉川弘文館、1956年)。

しかし、率直に言えば

疑問1:漢文として水行もしくは陸行と言う選択肢が複数ある読解は可能なのか？

と言う疑問が生じる事になる。漢文の読解是非については中国人がどのように判断するのか判断を仰げば解決する筈なのであるが、どうやらそのように簡単には済まないようだ。何故なら、中国人同士で見解が異なるからである。例えば張明澄氏は榎説に近い^(※1)。もっとも、張氏の論説は放射説ではあるものの伊都国からの分岐では無く末盧国からの分岐となっている。謝銘仁氏は榎説を誤訳と断じている^(※2)。これでは誰の読解が正しいのかと言う事になるが、この議論については実は陳寿自身が解法を示している。もっとも、解法を明らかにせずとも榎氏や張氏の見解が道理に合わない事は、漢文を白文で読める者であれば分かる筈だ(私の漢文読解力でも分かる)。陳寿は、候補が複数ある場合には次のような句形を採用している。

諸國文身各異 或左或右 或大或小

竹箭或鐵鏃或骨鏃

其人壽考 或百年或八、九十年

下戸與大人相逢道路 逡巡入草 傳辭說事 或蹲或跪

絶在海中洲島之上 或絶或連 (『三国志』『魏志』倭人伝)

倭人伝だけでも[或A或B]と言う句形が何度も出て来るが、韓伝等にも見出せる。この句形以外でも複数の候補を示す箇所があるのかも知れないが、いずれせよ複数の候補が存在する事が読み取れる文章にしている訳だ。となると榎説を是とするのであれば、行路は次のように記されていてしかるべきであろうと思われる。

南至邪馬壹國 女王之所都 或水行十日或陸行一月

しかしこのように書かれていないと言う事は、陳寿は水行と陸行を排他による移動手段の選択であるとは考えていなかったと言う事になる。ならば陳寿はどのように考えていたのかと言う事になるが、実は良く分からない。恐らく次のどちらなのであると思われるが、判別の決定打を見出しにくい。

- ・水行で十日移動した後に陸行で一ヶ月移動する
- ・水行の合計が十日で陸行の合計が一ヶ月となり、水行と陸行の移動手段の切替が複数回発生する

この点は、取り敢えずは判断を保留しておきたい。さて榎氏は何故道理に合わない見解を採用したのかと言う事になるが、一般論として歴史学者は漢文の読解が不得手の者が見受けられる(考古学者に多い傾向を感得するが、東洋史文献研究者も意外と不思議な読解を行うようだ)。榎氏も文献を誤読してしまったのか、それとも自説を唱えるために牽強附会を強行してしまったか。張氏の場合は現代中国語で古代漢文を読解してしまつて誤読に陥っているように映る。どうやら榎説は残念ながら成立しないようである。なお、ここで述べているのは榎説の考え方(の一部)が間違っていると言う事であり、榎氏が考えた女王国の所在地(福岡県旧三井郡)は結果的に正しいと言う事はあるのかも知れない。

2 放射説の是非

榎説と放射説は不可分と思われてしまっているのかも知れないが、私は放射説と榎説を分けて考える事が出来ると見做している。ならば放射説は成立するのであるだろうか。実は放

^{※1} 『誤読だらけの邪馬台国』(張明澄、久保書店、1992年)。

^{※2} 『邪馬台国 中国人はこう読む』(謝銘仁、徳間書店、1990年)。

射説が採用されている史書が存在する。放射説が採用されていると言うと正確ではなく、記法が採用されていると書いた方が正しいと言うべきか。『三国志』と同時代史書となる『魏略』^(※1)が放射記法を採用している。榎氏が放射説で主張している論理と正確に一致していると言う訳では無いが、考え方自体は近い。該当する放射記法の記述は次の箇所となる。

(1) 大秦國一號犁靬 在安息, 條支西大海之西 從安息界安谷城乘船直截海西 遇風利二月到 風遲或一歲 無風或三歲 (『魏略』西戎伝逸文)

(2) 卻從安谷城陸道直北行之海北 復直西行之海西 復直南行經之鳥遲散城 渡一河乘船一日乃過

周迴繞海 凡當渡大海六日乃到其國 (『魏略』西戎伝逸文)

引用した(1)と(2)は別々の行路文なのであるが、非常に難解で読解も一定していないと言うのが実状である。記述に登場する地名あるいは名称は次の通りであろうか。それぞれの名称は何となく分からなくも無いが何とも言えないと言う微妙さに思える。想定名称(「何々か?」と書いた箇所)は私の見解に拠っている。

- ・大秦国(ローマ)
- ・犁靬(リキアと言う見解あり。もしくはラテンか?)
- ・安息(パルティア)
- ・條支(シリア)
- ・大海(地中海)
- ・安谷城(アンティオキア)
- ・(安谷城陸道直北行之)海(黒海と言う見解あり。もしくはアドリア海か?)
- ・鳥遲散城(アテネと言う見解あり。もしくはビュザンティオンか?)

鳥遲散の表音は次の通りなので、上古音であればウァーディエーサンとなるのでワディサンか。中古音であればオーディーサンとなるのでオディサンとなるが、当て嵌まりそうな地名が見付からない。

表1 鳥遲散の表音

字	上古音	中古音	中世音	現代音	拼音	呉音	漢音	万葉仮名
烏	・ag(ウァ)	・o(オ)	u(ウ)	u(ウ)	wū(ウー)	ウ	オ (ヲ)	イ(日本書紀) ^(※2) ウ(日本書紀,万葉集)
遲	dier(ディエ)	d, ri(ディ)	tʃ·i(ツイ)	tʃ·i(ツイ)	chí(チー)	ジ(ヂ)	チ	ヂ(万葉集)
散	san(サン)	san(サン)	san(サン)	san(サン)	sàn(サーン),sǎn(サァン)	サン	サン	該当する表音無し

鳥遲散城は一応ビュザンティオンと見做しているが、この地は後にビザンツ帝国(東ローマ帝国)の国都になる地でトルコのボスポラス海峡の西岸側であり、現在はイスタンブールと呼ばれている。もっとも鳥遲散城からローマまでは海路で6日と記されているのでもう少しローマに近い方が良くも知れない。あるいはギリシアのどこかであろうか。アテネと言う見解は充分にありそうにも思える(Webに書かれていた見解であるが、残念ながら匿名のため研究者名を記せない)。アンティオキアからローマへ至る経路として、次の二行路を記録している事が分かる。

(1) はアンティオキアから地中海に出て、海路を通過してローマに至る

(2) はアンティオキアから黒海沿岸の陸路を迂回し、地中海を経てローマに至る

と言う事になる。これを地図^(※3)で表すと、次のようになる。

*1 曹魏朝もしくは西晋朝 魚豢撰『魏略』。

*2 借訓の万葉仮名か。

*3 白地図専門店の白地図(<https://freemap.jp/item/world/world1.html>)を基に編集している。

図3 アンティオキアからローマまでの行路地図



図中の矢印は私が想定する行路であり、魚豢が描いていた行路とは必ずしも一致しないかも知れない事を断っておきたい。また、率直な疑問として、疑問2: (2) の行路は黒海沿岸を迂回せずに小アジアからギリシアに渡ってしまえば良いのでは無いか？

とも思うが、あるいは黒海では無くアドリア海沿岸を迂回したのかも知れない。これは図中の(2)'として描き込んでいる。いずれにせよ、『魏略』はある

地点から分岐する行路記法(つまり放射記法)を採用して書かれた史書と言う事になる。『魏略』西戎伝が放射記法を採用している以上、散逸した『魏略』倭人伝(もしくは倭国伝であったかも知れないが)において倭国への行路記述にも同じ手法を採用している可能性は高いのではないかな。

実は『魏略』には奴国・不弥国・投馬国は登場しない(記載されていたが脱落したのかも知れないが、元々記述されていなかったとも考えられる)。伊都国の後に女王国が現れるので、放射記法(もしくは放射記法に近い記法)が採用されている事を示唆しているとも読み取れる(放射記法に近い記法と量して書いているが、つまりは道行き記法の事である)。

3 陳寿は『魏略』を基に『三国志』を編纂したのか

榎氏は陳寿が『三国志』を編纂する際に『魏略』を読んで参考としていたと主張しているが、これは非とすべきであろう。陳寿が『魏略』を見ていたかどうかは何とも言えないが、『三国志』東夷伝序文や評には『魏略』の史書名が現れず、読んでいた形跡を見出せない。陳寿が『魏略』を読んでいたが意図的に見なかった振りを行った可能性もあるが、質直と評される^(*)陳寿の性格を顧慮すると、それは無さそうではある。同時代史書としては編纂時期が近過ぎて擦れ違ってしまったのかも知れない。『魏略』と『三国志』はほぼ共通の記述が見られるが、それは魚豢と陳寿が共通の史料(西晋朝史局に収蔵されていた史料)を参照していたと言う事に拠るものと考えるのが自然であり、当時の状況からすれば道理に適っている。もしかしたら両人は洛陽の史局で会っていたかも知れない。あるいは陳寿は魚豢の見解を聞いていて、『漢書』西域伝も参考にしつつ別の記法を想出した可能性はある。これが道行き記法として結実したと言う事なのかも知れない。

■ 前回の会報の目次と話題

- ・生口十人で洛陽に朝貢の謎
名古屋市 田沢正晴
- ・邪馬台国への1万2千里再考
東海市 大島秀雄
- ・連続説の是非
吉川市 堀口啓一
- 〈訂正:タイトル〉×「連続性の是非」○「連続説の是非」
- ・陳寿の付度と范曄の誤認
名古屋市 石田泉城

■ 例会の予定

- 1 日時 令和7年12月13日(土) 13時半
- 2 場所 名古屋市市政資料館 第4会議室
- 3 次々回以降の予定
1/17、2/14、3/14、4/18、5/9

■ 投稿締切り日 12月25日(木)

送付先 toukaikodai@yahoo.co.jp 石田

*1 唐朝 房玄齡等撰『晋書』陳寿伝。